

姫路昆虫同好会発足によせて

山本 広一

県下には何種ぐらいの昆虫がいるであろうと聞かれても速答できるものでない。もっとも、ある種の分野に限ってはおよその数がつかめても、さて、それがどのように分布するかとなると難しい。最近の調査によると中国山地東部(兵庫県側)で得られた昆虫は蝶蛾の類(ミクロの類を除く)が約680種、甲虫類にいたっては1,400種にも及んでいる。実に播磨境の山々やこれより北と南に広がった中国山脈の山々は種類の豊かな地域であり、分布上注目すべきものも少なくない。

昭和5年の頃である。兵庫県では“郷土の自然物及び自然現象を調査研究する”ために兵庫県博物学会が発足し、大きな成果を収めたが、昭和16年兵庫県中等教育博物学会に合流し、さらにその躍進を企てた。しかし、その活動は時局の悪化によって妨げられ、会もいつしか立ち消えた。創立以来10余年、その業績をながめると植物・地質の調査が主になり、機関誌上に残された昆虫資料は多くない。というのも昆虫が植物ほどに得られなく、採集自体が難しかったためだろう。

一般に昆虫熱が高くなり、同志の集いがあちこちに誕生しはじめたのは戦後のことである。しかし、新たな会はほとんどが地方的な存在か、もしくは学校単位のものであったため、その運営が難しく、やがては消滅の憂き目に遇ったものもある。しかし、彼らが昆虫の分布や生態の研究調査につくした役割は高く評価されてよい。とりわけ日本の蝶に関してはそうした感を深くする。

さて、本県で最初にできた同志の会は“虫同友会”でなかろうか。創立はたしか昭和22年であったように心得る。ところが、この年兵庫県生物学会が設立され、その前年にはすでに三重県下に出来ていた近畿甲虫同好会(現在の日本甲虫学会)が宝塚へと移された。その後、神戸昆虫同好会・採集と観察の会・尼崎昆虫同好会・阪神学生生物研究会・兵庫

むしの会・淡路昆虫同好会・西脇自然同好会・兵庫昆虫同好会等々が誕生し、今またここに姫路昆虫同好会が発足したわけである。

したがって、これらに学校独自の生物研究班を加えると同志の会はかなりの数になるだろう。私は本会の誕生を喜しく思うとともに、この会が姫路地方を中心に播磨の昆虫相を明らかにし、ひいては県下全域の解明に寄与するように希望する。播磨には北部に1,000m級の山々が未踏のままになっており、植物相の複雑な宍粟奥地が調査される日の早かるようにと待っている。

ところで、この際特記したいのは西播地方の昆虫が早くも明治の後半に大上宇一氏や井口宗平氏ら郷土の先覚者によって調べられ研究されていたことである。この点、欧米人に拓かれた神戸地方のそれとその趣を異にする。

大上氏は慶応元年揖保郡香島村篠首(現在の新宮町)に生まれ、昭和16年までの生涯を郷土の生物・地質・気象・産業・民俗等広い範囲の研究に没頭された方であり、発表された報文は400篇を下るまい。昆虫についても造詣深く、“播磨蝶類報”“播磨産象鼻虫科略報”“播磨産葉蜂科報知”等々挙げれば限りはないが、明治39~40年昆虫世界に寄せられた“播磨産甲虫類”はルイス氏その他の書を取り入れた価値あるものといわれている。

また、井口氏は佐用郡久崎村榎田(現在の上月町)の人、明治18年土地の農家に生まれ、明治37年名和昆虫研究所に学んだが、2年ばかりで帰郷し、その後は郷土の昆虫相の研究に専念されたと聞いている。この間に集められた標本は3,000種にも及ぶ由、その業績は氏の名譽をになうイグチサシガメ・イグチヒラタサシガメ・イグチヒシウンカなどの名とともに永久に消えるものでない。氏の発見された昆虫は数多く、研究は昆虫の全野にわたり、大正11年以後に話題を呼んだシルビアシジミも実は大正11年中原和郎博士が井口氏からの

「読者の目」

神戸新聞社 大谷 記者

標本(久崎産)にもとづいて命名されたものである。

ところで、久崎は蝶の宝庫というに相応しい。昭和9年私は佐用川沿いに広がったナラガシワ林に分けいって新種とおぼしき蝶を得、同28年その詳細を記録した。これが今日ヒロオビミドリシジミと呼ばれる珍種なのである。

明治34~35年頃の“博物之友”を繙くと、しばしば福田氏(後の駒井卓博士)の名が見うけられ、姫路周辺での氏の活躍ぶりがうかがえる。なかでも明治35年揖保郡竜野町で手にされたキマダラルリツバメは岐阜県に次ぐもので、広く世の注目を惹きつけた。福田氏は明治36年姫路中学校を卒業された方であり、この発見も氏が在学中の業績であったわけである。

また、記録によると明治34年東郷隆次氏は神崎郡船津村でモンキアゲハを採集されている。今ではさほど珍しいものとは云えないが当時は南方系のこの蝶が本州にいるかどうか疑われ、一部に話題を呼んだこともあり、船津村はその後に得られた姫路市下寺町とともに本州で数少ない産地の一つとなっていた。

このように西播地方における昆虫相の研究は歴史が古く、由緒深いものがある。これは姫路以西の地がこうした面で進んでおいた証左であるといつてよい。ここに私どもは先輩諸兄の後を継ぎ、この地の昆虫相をより明らかにするために精進すべきでなかろうか。

会の門出にあたって駄弁を勞し、さらに今後の発展を祈りたい。

たいがい帰宅するのは子供たちが寝てしまった時間なのだが、まくら元に紙箱が並んでいて、踏みつけないように気をつけなければならない。一度、いっばいきげんの千鳥足で箱をけとばしたら、足の指にチクリときた。団地の周りで集めたハナムグリが十数匹はいていたのだ。

いま、小学二年生と幼稚園の息子が飼っているのは、キアゲハの幼虫三匹、カラスアゲハの幼虫が五匹、カイコ八匹、デメキン一匹カブトムシ二つがい、ブンチョウ一羽、アメリカザリガニ一匹、オタマジャクシ十数匹。それに、トカゲやカエルが出入りしているが、友だちと交換することが多く、一定していない。幼稚園の息子は、メンコ五枚でアオガエル一匹を手に入れてきていた。

子供たちにとって、これらの生き物は、メンコやミニカーなどと同じおもちゃの延長線上にあるようだ。いっしょに遊べる仲間であり、おもしろい動きを見せてくれる友だちとされているらしい。しかし、アゲハの幼虫がサナギになり、木の枝のサナギは灰色、ミカンの葉のは緑色、ビンの壁のは白っぽい色に変わっているのを発見したとき『どうして違うのだろう』『チョウになっても一匹ずつ色が違うのかな』といいだした。

残念ながら、私は子供たちにうまく説明してやれる知識を持っていない。少年時代、網を持って駆け回ったことがあったが、いまから思えば、きれいなおもちゃを集める競争に夢中になっていただけで、チョウを通じて自然を知るのではなく、自然からチョウをもぎとっていたのだった。

昨年の夏、いっしょに仕事をしている仲間が、播磨のあちこちを訪ねて昆虫の生きているようすを観察、写真とともに連載した。ヒメハルゼミの脱皮の瞬間、ハッチョウトンボの交尾のありさまなど珍しいと思えるものから、カマキリ、カメムシなどだれでも知っ

